令和４年度　研究主題

主体的・対話的に学ぶ子の育成

１　研究主題設定の理由

（１）学校教育目標から

＜下府中小学校の教育目標＞

未来を創るたくましい子どもの育成

どんな場でも自分の考えをはっきり述べる力
多くの人とともに社会を創るためのコミュニケーション能力
自分とは違う人の思いや状況を想像する力
人と力を合わせて物事を解決したり新しいことを生み出したりする力

〔校訓〕
友愛　創造

〔めざす子どもの姿〕
①自ら考え表現し　ともに学ぶことができる子
②思いやりをもち　温かな言葉をかけられる子
③元気に生活し　進んで働くことができる子

楽しく充実した学校生活は、教師と子ども・子どもたち同士の人間的な結びつきをもとに学校教育目標が、各学級で具体的に実践されることにある。学校生活の大半は授業であり、学習の時間が子どもたち一人一人にとって「学びの楽しさ」を感じるものであれば、学校に「通うことの楽しさ」につながり、学校教育目標の達成に繋がっていくものと考える。その取り組みの重点として、「主体的・対話的で深い学びの実現」「みんなでわかる授業づくり」「安心してまちがえることのできる学級」が掲げられている。教育目標とその具現化の方策が常に Research（調査）Plan（計画）Do（実践）Check（評価）Action（改善）のサイクルを経て、全校が統一見解のもと、各学年学級への浸透が図られる必要がある。

本校の教育目標を推進していくにあたって「自ら考え表現し、ともに学ぶことができる子」の育成のためには、研究を通して日々の学習指導を充実させ、子どもの主体的な学びを育み、子どもの実態を踏まえた授業づくりを行うことが大切であると考えた。また、対話的な学び（学び合い）を軸とした授業づくりを行い、その中で、ともに学び、互いの良さを認め、支え合いができるようになる「思いやりをもち、温かな言葉をかけられる子」、そして身につけた力を生活の中で生かし豊かに主体的に生活しようとする「元気に生活し、進んで働くことができる子」をめざすこともできると考え、研究テーマを設定した。

（２）子どもたちの実態から

本校の子どもたちは素直で明るく、友だちと認め合いながら楽しんで学習に取り組むことができる。これもひとえに、本校の教職員が子どもたち一人一人を大切にした指導を続けてきたことと家庭や地域の協力があった結果である。自分の考えをもつことや、その考えを様々な言葉を使って豊かに表現し、互いの意思疎通を十分に行うことを苦手としている子は依然として少なくないが、昨年度12月に全児童を対象に行った授業アンケートの「あなたは、自分の考えを相手に伝えることができていますか」という質問項目の肯定的な回答をする子が78.8％と令和2年度の66.2％と比較すると、大幅に向上しており、2年前、3年前と比べても一番高い結果が出ている。その要因として、令和2年度がコロナ禍元年で、グ

ループ学習などが制限されるなど、いろいろな制約の中で学習をしていたが、令和3年度は、9月～12月はコロナ感染者が減少したこともあり、グループ学習をはじめ、対話的な学習活動が比較的やりやすかったこと、ICT機器の導入が進み、リモート学習など密を避けながらコミュニケーションを取る手段が確立されたことが挙げられる。そして、これまでの校内研究で行ってきた成果が現れてきているとも考えられる。

今年度もコロナ禍の中での学校生活を子どもたちは強いられているが、コロナ禍がもたらした授業形態の変化は決して子どもたちのマイナスばかりになるわけではない。コロナ禍の中でも、子どもたち一人一人が「成長できた」という実感を日々重ねていくことが大切であり、学び合うことを通して「あなたに伝えたい（だれかに伝えたいという思いをもつこと）」「私に伝えられている（言葉を自分に向けられたものとして受け止められるようにすること）」を大切にした主体的に学ぶ子を育成することが必要であると考える。

（３）昨年度までの反省から　～国語科での校内研究継続へ～

令和元年度から研究主題を「主体的に学ぶ子の育成～ともに学び合う国語科の授業を通して～」とし、国語科に焦点をあてた教育実践を積み重ねてきた。１時間の授業の中で子どもたちにつけたい力を考えるだけではなく、本時の前後や授業の意味を考えながら主題に迫っていく校内研究となるようにしていくことを意識した単元づくりを行ってきた。

研究２年目の令和２年度は、今年度の研究主題と同じ「主体的・対話的に学ぶ子の育成」とし、子どもたちがわくわくどきどきするような発問にこだわり、「友達に考えを伝えたい」「友達の考えを知りたい」と心から思えるような学習環境を整えることに取り組んできた。子どもの思いや考えを大切にした課題設定や単元構成をすることは、主体的に学ぶ子の育成に繋がる重要なことだと再確認できた。

研究３年目となる令和３年度は、子どもの思考、願いにそった学習課題の設定、単元構想を目指し、各ブロックで発達段階に応じた単元構想図を作成し、１コマ１コマの授業を点で見るのではなく、学習の流れやつながりを意識した授業展開を思案していく中で、子どもたちのみならず、教師も見通しをもって主体的に学習内容について学ぶ機会になった。

国語科での校内研究も３年目を終え、研究としては一つの区切りを迎えた。しかし、年間反省では、次年度も国語科で継続して研究を行いたいという意見が多く出た。理由として、大きく以下の２つが挙がっている。

① 単元構想図を作成することで、単元全体を見通して授業作りをしていくことで、子ども達のよりよい学びに生かしていける良さに気付いたので次年度も継続して行いたい。
② 仮説を立てて手立てをを探っていくことで研究は深まったが、ブロックごとに目指す姿がはっきりしなかった点を改善して取り組みたい。

実際に単元構想図を作成しての授業作りを行う実践は昨年から取り組み始めた実戦で、手探りで行った感があり、単元構想図の形式などは、昨年度の形式をベースに改善を加え、より子どもたちの思考の流れに沿った単元構想が練られるようにブロックで工夫して作成していけば、よりよい取り組みになると考えられる。また、授業提案の際には抽出児を設定しているが、研究協議などで抽出児を生かし切れていない課題がある。主体的・対話的に学ぶ子を育成する上で、「子どもの思考、願いにそった学習課題の設定や単元構想」「機能的で必然性をもったグループ活動」について抽出児を生かした授業作りは有効な手法であり、改善の余地がある。

今年度の研究では、これらの課題と向き合うことで、主題に迫っていきたいと考えている。

2　研究の仮説

「主体的・対話的に学ぶ子の育成」に向けて、次のような視点をもって授業づくりに取り組むことで、研究主題に迫ることができると考える。

①　子どもの思考、願いにそった学習課題の設定や単元構想をすることにより、見通しをもって主体的に学ぶことができるようになる。 ②　多様な考えを交流する学び合いの場を工夫することにより、自分の考えをより豊かにし、対話的に学ぶことができるようになる。 ・あたたかい聴き方（聴き手)、やさしい話し方（伝え手)、共感的な関わり方（関わり手） →今年度は、個の見取りに焦点を当てる。

3　研究の内容及び方法

（1）授業研究

・研究教科は、国語科とする。

※全体で領域は定めないが、研究を深めていくためにブロックごとで領域を揃える。

（2）研究の仮説にせまるための手立て

・子どもの実態と教師の願いから、ブロックで定めた領域における「めざす子どもの姿」とその姿に迫るための具体的な手立てをブロックごとに設定し、授業実践等を通して検証する。

・研究の仮説にある２点について、学級の実態や学習内容に応じて提案する。

・提案授業は、子どもたちが対話的に学び合う場面設定が望ましい。

（3）「主体的・対話的に学ぶ子」を育てるための視点と方策

本校でとらえる「主体的・対話的な児童の姿」は次のとおりとする。

主体的　⇒　自ら考え、まとめ、他者と比較しながら互いに高め合おうとすること。 対話的　⇒　友達の考えを聴いたり、自分の考えを話したりしながら確かめたり、修正したり、広げたりすること。 互いの考えを比べたり、よいと感じたことを認めたり、取り入れたりする態度を身につけること。

★次のような視点をもって授業づくりに取り組むことで研究主題に迫る★

課題設定と単元構想

〇主体的に学び、考える力を育てるための、よくわかる楽しい授業づくりをする。

・１コマごとに授業計画するのでなく、単元全体をデザインする（単元構想)。

→単元を通しての狙い、育成したい力を見極め、絞り、単元を貫く学習課題を設定する。教師も子どもたちも、本単元では何を目標として、どのような流れで学習に取り組んでいくのか、見通しをもてるようにする。

→単元を通して子どもたちがどのような力を身につけるのか、またそのためにどのような学習課題や学び合いの場を設定するのか計画する。

→板書計画やノートのとらせかた、机間指導、学び方のルールやマナーの共通理解等、様々な要素も併せて総合的に計画する。

→単元計画と子どもの実態の間にズレが生じた場合は、計画を変更しながら進める。

・子どもたちが楽しく学習に取り組んでいけるような場面設定、課題、発問を考える。

・発達段階と子どもたち一人一人に応じた指導内容や指導方法を考える。

学び合い

〇子どもが楽しく対話的に学ぶ場の工夫をする。

・学び合うことのよさを子どもたちに伝える。

【例】①学校は、みんなで学ぶ場所である。

② 授業は、みんなの力で学び合った方がより学習が深まっていく。

③ 友だちに伝えることで、自分の理解がより深まる。

・話す・聞くの系統表を作成し、６年間の系統性を持たせて取り組んでいく。【別紙参照】

→“話す・聞く”ルールをまとめていくことで、６年間の話し方・聞き方のステップを統一する。

・子どもたちが話合いをしやすい環境をつくる。

→「聴く」姿勢と「認め合う」姿勢を大切にする。日頃から、子どもたちが互いに認め合い、支え合い、励まし合えるような温かい雰囲気の学級になるよう努めていく。

→子どもが「話したい」「聞きたい」と感じるような話題や論題を設定する。

→挿絵や図などを入れながら発達段階に応じた工夫したワークシートを用意したり、どのようなことを伝えたいのか事前に自分の考えをもつことができるように十分時間を確保したりする。

→筆談や付箋による交流、ハンドサインや話型などの工夫をする。

・機能的で必然性をもったグループ活動を行う。（グループ活動＝対話的な学習ではない。）

→メンバー構成を考えたり、タイミングを考えたりと目的意識をはっきりさせる。

→二人一組やグループでの話合いの後は、友だちと話し合ったことを一つでも話せる状態になっていることを共通理解しておく。

・事前にノートやワークシートを見取り、机間指導をする等、子どもたちが何を考えているのか把握しておく。

・課題に対して「わかっている子」を話合いの中心に据えるのではなく、「わからない子」を話合いの核に据えることで、学び合いをつくっていく。

・子どもたちの声で、知恵で、話し合いをつないでいくことを目指していく。そのために、教師は「聴く」「待つ」「認める」「軌道修正する」姿勢を大切にする。

・言葉による見方・考え方を働かせ言語活動を通して、自分の思いや考えを深める。ただし、言語活動とは、教科の学力を育むための学習活動であり、それ自体が目的となるものではない。そこで、単元の目標を明確にし、それを達成するために必要となる言語活動を精選し、取り入れる。

【言語活動例】①「紹介や説明」（伝えたいことを話すこと）

②「異なる立場での話合い」（互いの考えを基にして考えを広げること）

③「記録」（事実を書き記すこと）

④「要約」（文章などの大要をとりまとめて短く表現すること）

⑤「説明」（記述を更に正確にし、定義づけること）

⑥「論述」（論じ述べること）

⑦「討論」（互いに議論を戦わすこと）

個の見取り

〇抽出児の見取りを共有化する。

・「抽出児見取りシート」を作成する。

→見取りシートをを活用することで、観察者の抽出児の見取りの視点を焦点化する。

→教師の働きかけによって抽出児がどのように変容したか見取ることができる。

→抽出児の見取りをその後の研究協議や指導などに生かしやすくなる。

○抽出児見取りシートの書式（３パターン）

Ⅰ全体を見ながら抽出した児童を見取る場合

時刻	指導者・児童の発言	抽出児	
		A	B

Ⅱ抽出した児童を集中的に見取る場合

時刻	観察場面	指導者の関わり	抽出児の姿	観察者の所見

Ⅲグループの中で抽出児を見取る場合

所属グループ（　　）班→　抽出児は○で囲む

A 児	B 児	グループ内での関わりと様子
C 児	D 児	

単元や本時展開にあった記録用紙を選択して見取る。

４　研究の方向性

研究を積み重ねることにより主題にせまっていく。

○１年目（令和元年度）…児童の実態把握、育てたい力の確認、講演会の開催（研修会）、授業実践と検討（成果と課題を明らかにする）

○２年目（令和２年度）…元年度の反省を生かした授業実践と検討（成果と課題をまとめる）

○３年目（令和３年度）…児童がお互いの考えを分かり合おうとする中で主体的・対話的に学ぶことができる単元・授業の創造の実践・定着を図る。

○４年目（令和４年度）…抽出した児童の見取りを生かしつつ主体的・対話的に学ぶことができる単元構想を創造し、授業の実践を行う。

5　研究組織

研究推進委員会

〇研究推進のための企画・運営・調整を図る。

〇必要に応じて、研究の方向性や到達点・課題について話し合う。

〇一人一人の授業を意義あるものにしていくため、全体会での協議の柱立てを中心に検討し、「主体的・対話的に学ぶ子」の具体的な支援のあり方について明確にしていく。

〇全体会での提案終了後に推進委員会を設け、成果や課題を明確にする。それを全体で共通理解し、研究を積み重ねていく。

◎ブロックまとめ役の主な仕事は、ブロック研の計画や運営・司会、ブロック提案のコーディネート、全体会の企画・運営、実践記録集関係業務等。

全体会

〇研究内容・方法についての共通理解を図る。

〇提案授業後の全体会の運営（司会・記録）は、提案等を考慮し輪番で行う。

〇全体会での提案授業をもとに研究協議を行う。

〇教師集団による話し合いの力をつけるため、グループ討議や全体討議を適宜取り入れていく。

〇討議についての計画・児童の見取り等については、推進委員会にて随時提案していく。

ブロック研究会

〇児童の実態や発達段階が近い２学年（個の実態や発達段階に対応する特別支援級を含む）で編成した低・中・高学年ブロックに分かれ、ブロック研究会を開催する。また、必要に応じて、ブロック間の交流を行う。（下の表にある他学年ブロックの研究推進委員もブロック研究会に１名以上参加する。）

	低学年ブロック研究会	中学年ブロック研究会	高学年ブロック研究会
参加する他学年の研究推進委員	高学年研究推進委員	低学年研究推進委員	中学年研究推進委員

〇提案授業後のブロック研究会の運営は、各ブロックで行う。

〇研究推進委員は、成果や課題を明確にして記録を残し、次回の研究に生かす。
（他ブロックの職員も共有できるようにする。）

〇各ブロックは定められたブロック研究会の他、必要に応じて随時開催する。